

悩まない フライマンたちへ

ROUND 28

文 中馬達雄

(鹿児島県鹿児島市/ちゅうまんの夢や)

究極のストリーマー、白の#10
あらゆる魚が釣れる「ネギフライ」の誕生まで

フライフィッシングの歴史は、同時にフライタイイングの歴史でもあります。海フライでも次々と新しいパターンが紹介されています。

しかし海外でも日本においても、その歴史の浅さと海フライ人口の少なさから、スタンダードと呼ばれるような世界中誰もが愛用するフライパターンは少ない。

憧れの、しかし
読めなかった洋書

海フライというストリーマーとは、一般的に小魚のイミテーションです。海の餌生物のほんの一部分でしかない1cm以上の小魚が、海面上でも釣った魚の胃内容物としても目立つので、海フライはストリーマーと思われるようになりませんでした。

川の水生昆虫の成虫や陸生昆虫がドライフライとして完成し、ウエットフライの中からイミテーションと

キングラインでストリーマーを沈めるとあまりにも簡単に釣れて面白くないので、トップウォーターに溺れました。

薩摩湖で最高傑作が生まれました。その名も「ビートル・バグ」。車のフォルクスワーゲンの形をバルサで作り、テールにマラバーをつけたトップウォーターフライです。

浮いたり潜ったり、ふらふら頭を振ったりする優れものでした。作ったのは〈組員〉というあだ名の人です。当時、これがルアーなのかフライなのか論議を呼びました。フライロッドでフライラインを使って投げられるから、フライでいいと相成りました。

後に、私はダブルハンドのフライロッドでラバラ（ミノープラグ）をぶん投げて、スピニングリールにはできないアクションをフローティングラインとトリトリブで演出したら、スズキが簡単に釣れました。それからルアーとフライの境界線はあやふやになってしまいました。

レフティ・クレイのバスシリーズは、私のなかで最終的に、武者小路実篤シリーズにと発展しました。そ

してのニフが発展したように、海フライにおいても、川や湖のストリーマーの流行から海水魚のストリーマーへ、さらに甲殻類や極小プランクトンにと、様々なフライパターンが発展してきました。

初心者のころの私にとって、深フライ、池フライ、海フライというフライパターンの分類はありませんでした。情報も豊富ではなく、基本的な餌生物の知識も皆無でした。真冬に#10のモスキートを使い、逃げもののマス釣っていたぐらいです。

ロイヤルコーチマンはなんでも釣れると思っていました。海では薄っぺらなカタログや雑誌の小さな写真から、見よう見まねで古いアメリカンパターンを作っていました。「マスター・フライタイイング

の名も「胡瓜」「茄子」「人参」「へちま」「ピーマンバグ」。かの小説家が好んで色紙に描いた野菜をダイド・ディアヘアで形どり、スズキやバスや野鯉と遊びました。

じゃがいもバグを作っていたら、出来上がりは小学生レベルの「うんこ」の絵になってしまいました。そのうんこバグで50cmちよいのバスを釣ったら、熊本から来ていたベテランフライマンが「写真を撮らせろ」と走ってきて「なにこれ！フライ？」

「はい、うんこフライです。」彼はうんこフライを捨て、バックテール一袋全部乗っけたような巨大なデシーバーを横において写真をとっていました。今でも皆さんのフライボックスの飾りに収まっている、このウイングの異常に長いストリーマーは、1970年代からスタイルが変わりません。

私には牧浩之氏のようにフライを語ることはできません。いきあたりばったり、結果オーライです。魚の本音は解らないし、どうせ遊びだからタイイングまで遊ぼうというのが、レフティ・クレイから学んだことです。

ガイド」という本を東京の丸善で買い込んで、うれしくてジャズとブルースのバーをハシゴしながら眺めているうち、酔い潰れて失くしてしまいました。

憧れの、しかし読めなかった洋書は一晩で消えました。翌年ティムコから和訳本がもつと安く出た時は、二重に悔しかった。

そんなころ、レフティ・クレイ作のバスバグやデシーバーと出会いました。外国のストリーマーのものまねもしなければいけないし、本物の餌のイミテーションもしなければならぬのだと思っていた私のフライタイイングは、薄っぺらな科学的・合理的呪縛から解き放たれたのです。色も形も自由なのだ！

オリジナルで遊ぼう。
物まねはやめた。

1970年代、鹿児島・薩摩湖のブラックバス釣りに海フライを試しておりました。当時はルアーもフライもライバルが一人か二人でしたので、何を使っても釣れました。シン

さらに申しますと、釣り雑誌で、3年おきに紹介される「リップ付きストリーマー」では、スズキはリップ付きミノールルアーほどには釣れません。そのフライの紹介者は、ロングAとかラバラをもっと研究してからフライを作ってください。つまりルアーフィッシングを真面目にやってください。

早い話が、フライに自信がないのならルアーをしないさい、ばったもののフライをオリジナルのように載せるなどということ。

淡水用フライを
海フライで発展させる

「ワーゲンビートル・バグ」は、フローティングラインで引くよりも、シンクティップラインで引く方がアクションに幅が出ました。水面下に潜った時のボディとテールの揺れに、ぞくぞくさせられました。

陸っぱりシイラ釣り（鹿児島県外の人には信じてもらえない）に使うと、超ファストトリトリブしなくてもガンガンヒットしました。ただ、



私のフライタイイングは、薄っぺらな科学的・合理的呪縛から解き放たれたのです。
色も形も自由なのだ！